原初文字之意味及拡張

成澤 豪、寺山 祐策
武蔵野美術大学 視覚伝達デザイン学科

Abstract

きっかけは文字(漢字)を眺めていて思ったことだった。アルファベットに代表される表音文字は、認識した世界を、メディア分子（要素）で分解・記号化し、再びその意味情報をあるプロトコルによって再構築するが、文字（漢字）は、一文字が一語という意味情報ですでに成り立っている。　我々自身の思考図を鳥瞰して見たとき、試行錯誤の文脈を成り立たせているものはプロトコルではなく、「意味」という少なくとも一つの独立した価値レイヤーを与えられた情報の島の無数の(トリッキーな)連鎖によるところが大きいのである。そこには、分解された意味をどう伝えるかという幾度となく繰り返されてきた方法論ではなく、単なる情報が「意味」になったときからその本性として持つ連鎖性に潜在する、爆発的なネットワーク網の拡張力と、結論を導き出すことを前提とした構造体とは違う、可能性が可能性の状態でステイ出来ることで生まれる、次の可能性への予感(可能性)とも言える、意味情報と人間の関係性に生じる、柔軟なクリエイティビティを展望できる。文字(漢字)という一つのワールドモデルは人間の世界認識の拡大とともに、そのスケールを急速に増殖させていった。そんな膨大な文字(漢字)世界を記憶のバッファ領域として見たとき、それは人間の記憶という脳内の出来事の投影・痕跡であり、また、デザイン化された、潜在的連鎖性を有した「可能性のステイ」である。だとするなら意味の最小単位をさかのぼり、抽出することで、文字メディアに複写された古代の記憶(身体性とそれをとりまく環境の原風景)を読み解くことができるであろう。今回の作品は、今なお拡大の可能性を持つ「文字(漢字)」の世界をモチーフに、「意味」の持つ可能性(例えば、0と1の信号によりコントロールされるコンピュータとは違う、「意味の力学」が可能にする新しいコンピュータのシステム(あるいはルール)の可能性など)の探求への一つのステップである。